

なごり雪

ドアの郵便受けに軋む音がして、前の小路を発進するバイクの音が聞こえた。毎朝、定番の家事を済ませた加江が、テレビを前に朝の紅茶の残りを温めたマグカップを手にして、心待ちにしている音だ。

夫が支社長代理に昇進して、一家ははるばる鹿児島に移って来た。そして丘の上に新しく造成された住宅街にある、この一戸建ての借上社宅に住むようになって三年が経過していた。

加江は十年前の自分だったら、こうした単調な生活にはとても耐えられなかったと思う。しかし今は鹿児島という居住するのは初めての土地に来て、不案内な市内の地理や慣習への適応と、成長のテンポが早くなって来た二人の子供たちの対応だけで、日々明け暮れ終わっている。そしてこうして夫と子供二人を送り出し、お決まりの家事を終えた後のポッカリと解放された時間を嬉しいとさえ感じるのは、四十に手の届いた年のせいかとも思う。

加江は未だに地域の主婦たちとはあまり馴染みがない。長いこと男性が主体の職場にいた彼女は、彼女たちを前にして何を話題にしたらよいのか戸惑ってしまう。そして無駄な気遣いの後、すっかりくたびれてしまうのだった。そんな加江にとっての楽しみは、東京の友人たちと交わす電話と手紙であった。

加江は、そそくさと郵便物を取り出すと、その中に淡い萌葱色の花模様の封筒を見つけた。それは坂本マリからのものだった。開くと同じ柄の一筆箋に「結婚のご報告です」とあって、お手製のイラストの入った結婚報告の挨拶状が入っていた。

マリは、九年前まで加江が勤務していたS社の経理課にいた。K短大の英語科を出ていたが、才女というタイプではなく、おっとりして、一寸舌足らずのような口をきいた。しかし正義感が強く、納得出来ないときは、きちんと目を見つめてゆっくり意見を述べる。加江より六歳年下で、入社も四年後のこともあって、加江に妹のように寄って来ては、合点のいかないことを熱心に述べて加江の意見を聞くのだった。

加江はシステム開発という殆どが男性ばかりの中で仕事をしていたので、他の課の女性社員との付き合いはあまりなかった。それがマリのもたらす情報のおかげで、彼女たちとも付き合いきっかけが出来るようにもなった。OLというよりは主婦のエプロン姿が似合いそうなマリが、今まで独身だったというのは不思議なことだった。

先ず挨拶文の後にある新郎の名前を見て加江は驚いた。山岡進。かつて加江と同じチームで仕事をしていた男だった。たしか半年ほど前のマリの手紙では、中国旅行で知り合った現地の中国青年にお熱を上げている最中とあった筈だった。山岡は十年前には大阪に転勤になっていた筈だが、また戻ったのだろうか。加江は取り敢えず文末にある新居の電話番号に掛けてみたが応答がなかった。共稼ぎが当然のような昨今、マリもそのまま働いていることだろう。

加江は大学を卒業した春にS社に入社して、結婚し、長男の浩一の誕生の後も、何とか切り抜けて勤めを続けて来た。二子目の千穂を妊娠した九年前に、夫が名古屋に転勤になったこともあって、それまでの十年間の勤務に終止符を打ったのだった。

久しぶりのマリからの便りが結婚という朗報だったことに心弾んだ加江は、早めの昼食を済ませると外に出た。五月の午後の南国の陽光が、街路樹にきらめき眩しかった。

バスで天文館まで出て、間口の小さな薩摩焼きの店に入った。以前そこに手頃な値段の夫婦湯飲みがあるのを見かけていて、結婚祝をする場合はそれにしようと思っていた。

加江は、その店でやや落ち着いた菖蒲の柄の白薩摩を求め、女店主に「お祝」としてマリの挨拶状の住所に配送するよう依頼して外に出た。そして夕食の買物のためにデパートの地下に足を向け、俯いて歩きながらマリと山岡のことを思い出していた。

自分は確かに男女間のことには鈍いのだなあと加江は思った。今振り返って思えば、すでに加江が職場にいた頃に芽生えていたのかも知れないと思う。

事務所のビルの屋上から、缶ビール片手に多摩川の花火を見た時も確か二人はいたし、加江のチームが端末室前のベランダで焼き肉パーティをした時も、事務室のマリが甲斐甲斐しく手伝っていた。しかしあの時は他の若い女性も何人かいたのだから特別という訳でもない。きっと最近山岡が東京に戻って再燃したのだろう。まあ何はともあれ三十四才のマリを祝福することにしよう…。

加江はしばらくの間、マリの思い出から端を発した、長閑な職場の回想に耽っていた。僅か九年前のことなのに、日本の社会は何と殺伐とした空気に変貌したことだろう。加江は、彷彿と浮かび上がる帰らぬ数々の思い出を辿りながら、望郷の念にも似た切ない思いを噛みしめていた。

四五日が経った土曜日の朝だった。マリからお礼の電話があった。

「まあ、おめでとう。でもびっくりしたわ。ほら、この前の手紙では何か違った話じゃなかったの」

「うふふ。今まで知らなかったのは杉山さんだけだったりして。今度上京したときちゃんとお話してさしあげますから。この度は本当に素敵なお湯飲みありがとうございます」

電話はマリに代わり進が出て礼を述べた。彼は二年ほど加江の隣の席に居たので、やはりその声は懐かしかった。暫く近況報告をした後、彼は言い憎くそうに、口ごもりながら付け加えた。

「お伝えしようかどうか迷ったんですけど・・・。実は笠井さんが亡くなったんです。二ヵ月前に。癌だったんです」

「えっ。まさか。嘘でしょう」

加江は思いもかけぬ進の言葉に驚愕して絶句した。混乱した彼女は、何と云って受話器を切ったのかも分からなかった。

「笠井さんが死んだなんて信じられない。そんなことってあるだろうか」

笠井智彦。今の今まで全く意識の外にあった男が、大きく加江の眼前に立ちはだかった。

考えてみると加江は退社後の九年間、ただの一度も笠井に会うことなしに今日まで過ごしていた。そのことに気が付くと、表現の出来ない後悔の思いがひたひたと湧いて、それがいつしか引きずり込むような淋しさに変わった。加江は当然笠井とはいつか明るくお喋りする日があると信じて疑わなかったし、

その日が永遠に来ないということになるなどは夢にも思ったことはなかった。

それにしても山岡は、加江に笠井の死を告げるのを何故あんなにためらったのだろうか。それは加江には不思議に思えた。その昔の笠井と加江の間に、他人に何かを感じさせるものがあったのだろうか。

在学中に情報処理技術者の資格を取得していた加江は、S社に入社後、電算システム課勤務となった。電算システム課は、機械室、パンチ室、事務管理室の三室に別れ、事務管理室には四つのグループがあった。笠井智彦は財務グループのグループ長だった。山岡進は加江の三年後の入社で、まだその頃は姿はなかった。

加江は入社後の三ヶ月間の研修を終えると、笠井のグループに配属された。業務もどうやら理解出来て、日課も安定して来たその年の十一月の末、加江は以前から交際のあった杉山彰一と結婚式を挙げた。杉山との付き合いは、全く社外だったし、加江もそれを話すこともしなかったので、式の直前に報告を受けた職場では、ひとしきり話題になった。式には事務管理室長兼任の課長の斉藤信夫と笠井を招待し、二人とも出席した。ある運命の見えない細い糸が、加江の夫彰一と笠井の間にあったことを加江が知ったのは、その年も暮れのこととであった。

彰一が鹿児島出身だからという訳でもなかったが、式場は代々木の東郷神社であった。初冬の冷え込みが厳しく、昼近くなっても陽は射さなかった。境内には名残りの木の葉がちらちら舞っていた。仲人は、実質的に二人の仲介者である加江の伯父高橋慎吾夫妻であった。式のおよそのことは二人で決めていたが、どちらも遠方に住んでいる二人の両親に代わって伯父夫妻が細部の手筈を整えていた。

清楚な神前で、形通りに式が取り行われた。寒さが厳粛な式場を引き締めた。遠い鹿児島からは彰一の両親と妹が上京し、在京の従姉妹二人が列席した。加江の方も山梨在住の両親に弟と叔父叔母、それに在京の従弟妹が四人が列席した。

加江は日頃、結婚する以上は、たった一人の男性さえも幸福にすることが出来ないようでは、女として失格なのだと思っていた。今ここに、この男のために尽くすことを改めて神に誓うのだと思った。神前に向かう加江のひたむきな気持ち、彼女の表情を固くしていた。

「きびしか顔をした嫁御じゃ」

という鹿児島弁の囁きが加江の耳に入った。

重い鬘に伏目がちになった加江は、隣の彰一をチラッと見た。背筋の通った彰一は羽織袴が似合い、凛々しかった。

田舎の刺激の少ない環境の中で、加江は文学少女とは言えなかったが、読書少女であった。祖父の蔵書のある土蔵の二階の小さな窓辺で、文学全集などを片端から読み耽った。そして熱い恋愛を夢見て、自分にも滝口入道が出現することを期待し、願っていた。それがまさに現実になったのだ。

披露宴には、式に参列した双方の両親と身近な親族十三名の他は、彰一の会社関係の人が五名と友人三名が出席した。加江の方は会社からの二名、同郷の

友人と大学の友人各二名ずつであった。つつましい祝宴だったが、どこか肅然とした空気が漂った品格のあるお披露目となった。

新婚旅行は、高度成長のさなかであまり休暇もとれない時代のこととて、彰一の祖母への報告も兼ねて、鹿児島に行く決めていた。その晩は、上京して来た彰一の両親や妹と同じ新宿のホテルで一泊した後、東京見物をしてから帰ると言う三人と別れ、新幹線で九州に向かったのだった。

彰一は、損害保険会社T社の都内支店勤務で、加江の伯父高橋慎吾の配下にいた。慎吾はまだ支店長代理だったが、四十代半ばの働き盛りだった。類焼を免れた戦前からの自宅が中野にあり、駅からさほど遠くないこともあって、高橋家には若い社員がよく出入りしていた。賑やかな酒の席の好きな慎吾には、客人と家で飲むのが経済的でもあった。気さくな慎吾の妻良江と、少女期の二人の娘たちの快活な対応が、輩下の若者たちを惹きつけていた。

加江の母の房子は慎吾のただ一人の妹であった。戦時中に慎吾一家は山梨県の山村に疎開して、戦後も二年ほどそこで過ごした。まだ上京がままならない頃、房子は土地の小学校の教師藤沢敏夫と結婚することになった。東京に転入が出来るようになり、父母兄弟は戻ったが房子だけが其処に残ったのである。

二十年が経って、房子の長女の加江は、大学に入学して荻窪に一室を借りて通学するようになった。そしてその途中にある伯父の家をよく訪れていた。伯母も自分の娘のように快く面倒を見た。一才下の聡子も四才下の理恵も、小さい時から夏休みの大半を山梨の涼しい高原にある加江の家で過ごしていたから、加江は姉のような存在だった。三人はよく二階で、年頃の娘らしいおしゃべりや合唱、トランプなどをして伸びやかに過ごしていた。

杉山彰一は高橋家の常連と言ってよかった。月一二回は慎吾の晩酌の相手をし、夕食を食べて帰った。時には珍しい鹿児島の菓子や餅などを下げて来た。彼はやや長身で、日焼けした顔に眉が濃く、引き締まった骨太の体をしていた。学生時代は剣道の選手だったとのことだった。律儀そうで、武骨な仕種が男らしく見えた。普段は無表情で、一見とりつくしまのない様に見えるが、慎吾の相手をして酒が入ると、別人のように闊達に喋るのだった。意外と文学書にも通じているようだった。

時折は加江もそんな席に遭遇して、従妹たちと賑やかな一時を楽しんだ。良江は密かにゆくゆくは彰一を長女聡子の婿にどうかと思っていた。

加江が卒業を来春に控え、就職の相談に伯父を訪ねたある夏の夜だった。加江は駅の電灯の下に、先程見送った筈の彰一が立って居るのを見つけた。伯母や従妹たちと片付けを終え

ての帰途で、十時を大分回っていた。

「あら、まだここでしたの」

「ああ、一寸ね」

一礼して定期でさっと通った加江の後を、切符を買って改札した彰一が追った。終バスは出てしまったのかと加江はいぶかった。

「なに吉祥寺からも帰れますから」

近寄った彰一はまだ酒の匂いがした。荻窪で加江が降りると、彰一も降りた。「一寸コーヒーでも飲みましょう」

彰一は強引に駅前の細い路地にあるコーヒー店に加江を誘った。加江はある種の予感がして、無言で彼に従った。

薄暗い店内の隅に席を取ると彰一は、コーヒーを二つ注文した。窓外の赤青のネオンがちらちらと目に入った。

「加江ちゃん。僕と結婚を前提にして付き合ってくださいませんか」

彰一は真っ直ぐ加江を見つめていた。酒の力を借りての告白だったろう。加江はドギマギして目を見張った。

「あのそれは聡子ちゃんが……」

そうは言っても、加江は内心伯母の意向にもかかわらず、彰一は自分を選ぶかもしれないという密かな予感があった。大抵は従妹の影にいて、彰一と言葉を交わすことも少なかったのだが、何故かこの男は自分の特別の人だと感じるものがあった。

「僕の妻はあなたであってほしいのです。僕はずっと考えていたんです。うんと言って下さい。僕でどうですか」

俯いた加江は、ややあって強く頷いた。そして改めて「はい」と言った。彰一はホーツと深く安堵のため息をつくと、二三回頭をさげ、目を閉じ下を向いた。涙ぐんでいたのかもしれない。加江も膝のハンカチから目を上げなかった。彰一の真剣さを肌に感じていた。コーヒーが来た。二人は、目を合わすこともなく、無言でそれを飲んだ。

外に出た。彰一が手を延べたので加江もそっと手を出した。

彰一は両手で加江の手を包むようにして何回もゆすった。

「ありがとう。ありがとう」

と言っているようだった。そして振り向くこともなく足早に消えて行った。

加江のもとに彰一からの長い手紙が届くようになった。太いペン字で、自分の生い立ちや日頃感じたことなどをせっせと書き送って来た。加江も返事を書いた。この頃は殆ど電話でのやりとりが主になって、ラブレターは時代後れのように言われていたが、やはり心情を伝えるものは文字であった。もともとは文学志向だったという彰一の手紙は、独特の味があって、加江は感動さえ覚えていた。

加江は自分で書いた手紙の拙さに照れながらも、返事を書いた。そして月二回ほどは明治神宮や近郊の井頭公園などに出掛けた。会えば何となくれて、無言でただ景色を眺めていることもよくあった。しかし二人は同じものを見ているというだけで幸せを感じていた。会話はどちらかというとなら彰一が喋り、加江は聞き役が多かった。社員寮住まいの彰一はまだ薄給とも云える時代だったので、大衆食堂で軽くビールを分かち飲み、夕食を共にして別れるのが常だった。しかしクリスマスソングが街に流れ、人の流れも気ぜわしく感じるようになったある夜、物陰で彰一に腕を引かれた加江は、軽く唇を触れ合ったのであった。

お互い意識して大切にしていた二人の壁が破られたのは、年も明け加江の就職が決まって、荻窪の加江の部屋で祝杯を挙げた後の夜であった。彰一が立ち上がって、無言で電気のスイッチを切った。加江は漠然とその闇の中での行為

が、太古から神へ捧げる儀式のように感じて、彰一のなすがままに身を任せていた。窓外は粉雪がちらちらと街灯の明かりに舞っていた。

いつか二人とも慎吾の家から足が遠のいていた。加江は就職にも力を貸してくれた慎吾に、内緒でここまで来たことを申し訳のないこととと思っていた。それが一層、素直に二人の結婚話を切り出し憎くしていた。しかしそこは通過せねばならない関門である。

加江は卒業式を終えた日の夕方、彰一と慎吾の玄関のベルを押した。加江は母の送ってくれた薄いピンクの鹿子絞りの着物に借着の紺色の袴をはいていた。それは加江によく似合って初々しかった。

「まあ、杉山さんいらっしやい。加江ちゃんも卒業式ね。おめでとう。よくお似合いなこと」

良江は目を見張って言った。加江は一瞬二人をお似合いと言われたのかと思いい、顔を赤らめた。

座敷に通り、彰一が正座して右後ろに加江が座った。慎吾が座につくと彰一は膝の上の拳を握りしめて切り出した。

「済みません。お世話になりながらご報告が遅れました。僕と加江ちゃんなんですが、先頃結婚の約束をしました。それでまだ日取りは決まっていらないんですが、お仲人を是非お願いしたいと思ひまして、今日はお願ひに上がりました」

「何だ何だ。卒業のとたんに結婚か。杉山、お前もなかなかやるではないか」

慎吾は機嫌良く良江に酒の支度を促した。

「それはそれは、少しも知らなかったわ……。よかったわねえ加江ちゃん。杉山さんはうちの人の見込んでいる人よ。この所お見限りかと思ひていたらそういうことだったの」

良江はエプロンで手を拭きながら、内心の残念さをおくびにも出さず、にこやかに対応した。良江は聡子も杉山に憧れていることを知っていたし、彼女自身の期待もあった。そして密かに聡子の傷はそんなに深くなく済むだろうかと推し量っていた。

すき焼きが用意され、ビールで乾杯ということになった。彰一がいつになく饒舌に聡子の相手をした。

「加江ちゃんが仕事に慣れる秋ごろに式を挙げるつもりなんだ。聡子ちゃんも来てくれるだろう。聡子ちゃんの成人式の振袖姿を見損なってしまったから、是非着て来てほしいなあ。さぞかし綺麗だろうな。田舎の爺さん婆さんがびっくりするだろうよ。ね、頼むな」

そして彰一の懸命のお喋りの間に、いつか皆はすんなり納得させられて、こうなるのが自然だったかのようにさえ思えるのだった。

二人の新婚生活は、府中市の国立寄りの小さな借家で始まった。加江はバスで十五分の通勤だったが、彰一は西国分寺駅まで歩いた。そこからJR線からの乗り換えもあって、朝七時には家を出ねばならなかった。それに営業担当ということで、帰りは全く不規則だった。全てを知り尽くしていたと思っていた二人だったが、共に暮らし始めてみると、意外にお互い知らぬ面が多いことが

分かった。そうした発見や戸惑いがあったとしても、それは結婚した誰しもの味わう体験に過ぎないだろう。二人は懸命にお互いを思いやって、家事も分かち合い、幸福感で一杯の日々であった。

間もなく忘年会のシーズンになった。社員旅行は電算システム課全体で行くのだが、忘年会は事務管理室と機械室で行うのが習慣だった。暮れ近いある晩、近所の料亭に室全員が会した。下請のオペレーティング外注業者SDM社から派遣されている人たちも参加するので、三十名近くになった。加江は入社歓迎会の時は、まだ顔見知りのいない中での主人公扱いに、すっかり緊張していたが、今回はチーム外の人達とも接することが出来るので心待ちしていた。

女性ばかりのパンチ室が参加しないので、若い華やかさは当然期待出来ない。事務管理室の女性と言えば、加江の他は五歳ほど年上の二名だけである。小柄な原田と長身の沢本でどちらも地味な存在であった。彼女達は異なった大学の数学科を卒業していた。その確かな理論的思考に男性の間にも信頼があり、一目置かれていた。襖を払って作られた広間の中央に、壁を背に女性三人は並んで座った。定刻にはほぼ集まった。恒例通り通称「謹直の斉藤さん」の課長の乾杯から始まった。幹事が言った。

「藤沢さん、いや杉山さん。ご結婚おめでとうございます。入社早々ということで一寸驚きましたね。お互い知っているようで案外知らないのが職場仲間かもしれないですね。SDM社からの新人も三人もいますので、今夜は改めて簡単でいいですから自己紹介をして下さい。近況や趣味などを聞かせてほしいと思います」

座ったままで隅の席からめいめいが簡単に出身地や趣味などを発表した。適当な野次も飛んだ。加江の対面に座っていた石井がニコリともせず、ぶっきら棒に言った。

「僕の出身地は福岡です。趣味はセックスです。子供は二人。中河原に住んでいます」

加江はセックスが趣味という言葉が平気で人前と言える石井に驚き、思わず顔を赤らめた。彼とはグループが違うので話したこともなかったし、寡黙な人で、同僚と雑談などしているところを見たこともなかった。やや色白で髭の剃り跡が青く、苦み走ったニヒルな顔をしている。彼はサブリーダー格でもあり、人当たりは折り目正しかった。きっと若いパンチャーに人気があるのだろうと加江は思った。

二人の女性先輩の後、加江の番になった。

「私の故郷は甲斐の国も信州に近い小さな村です。南に甲斐駒ヶ岳、北に八ヶ岳を見晴らす素晴らしい風景が自慢です。趣味は読書くらいで凝っているものはありません。目下夕食の献立に頭が痛いです。府中市内に住んでいます」

「彼氏について話してくれ」

「甲州と薩摩の接点を聞きたいよ」

一寸席がざわめいた。

「杉山とは私の伯父の紹介でした。二年ほど前の在学中です。彼は昭和三十年生まれで鹿児島市の川内市出身です。カワウチと書いてセンダイと読みます。自然とこういうことになった訳で、ご報告するような熱烈なロマンなんて何も

ないんです」

「そんなに赤くなっちゃって。ずるいよな。入社前に決めておくなんて」

「誰かさんががっかりしてたぞ」

加江はそれ以上の質問には笑顔で会釈して過ごした。その後二三人の自己紹介が済んで、笠井智彦の番になった。

「僕の出身地は鹿児島です。今まで黙っていたんですが、実は杉山さんのご主人は僕の高校の三年後輩なんです。本当に世の中狭いと思いましたねえ。ですから鹿児島の質問は僕に任せて下さい。僕の旧悪のバレない限りお答えしますよ。趣味はマージャンとここかなあ。近頃はあまりやってませんけど。子供は六年生の女の子が一人。古女房と八王子に住んでいます」

加江はまた目を見張った。彰一と笠井が同窓だったなんて思いもかけなかった。そして何故笠井は彰一の先輩であることを今まで告げなかったのだろうかと言った。結婚式の席で顔を合わせたのだから、一言あってもよかったのではと思った。鹿児島から帰ってから入社した時も、加江にそんな話はしなかったのだ。

それにしても六年生の娘とは意外だった。六年生ということは十二歳になる筈だ。彰一が二十七歳だから笠井は三十歳。ということは十八歳で父親になったのだろうか。十八歳は高校三年生か卒業間もなくということになる。加江は指を折って確かめた。そして多分鹿児島は暖かいところだから、きっと子供も早熟で情熱的なのもかもしれないなどと漠然と想像していた。

徐々に酒が回り、歌が出て座も乱れて来た。女性三人はただ座っていたが、徳利を手に男性が次々と寄って来た。

「原田さん、今年も彼氏は出来なかったの。杉山さんに先を越されちゃったね」

「沢本さん、あんたの趣味がジグソーパズルとはね。駄目だよ、もっと体を動かさなくては。すぐに皺々の婆さんになっちゃうよ」

加江の伯父慎吾の家での酒の席は、伯父が杉山やその同僚たちと交わす時局や経済、哲学から文学までも幅広い話題を論ずる場であった。そこから加江はいろいろなことを学んだし楽しいものだった。この騒々しい酒席に加江は少しも馴染めなかった。職場の宴会とはこうしたものなのかもしれないと思いつつも、心の通わぬ人々とのうわべの会話に索漠としたものを感じていた。笠井が加江の前に座り、手にしたビールを勧めた。

「杉山さんはこっちでしょう」

加江はビールを一口飲んで、七分目ほど入ったままのコップを差し出した。「私、殆ど飲めないんです。ね、六年生のお子さんて、笠井さんは高校生で結婚なさったんですか」

加江は先ず気になっていた質問を直截にぶつけた。笠井は首を振って笑った。「あれは女房の連れ子なんです。まあ来年もしっかり頑張ってください」

とだけ言うと笠井はいざって、隣の沢本にビールを勧めた。笠井の子供のことは、職場では周知のことらしく、誰も話題にしなかった。加江はもっと他のことも聞きたいと思っていたので、引き止められず残念だった。そしてきっと自分の質問が不躰だったのだろうと反省したのだった。

加江は慌ただしい年末を迎えることとなった。二十八日が仕事納めで、午後

は大掃除のあと軽く一杯があった。四時も過ぎると、それぞれ「よいお年を」と挨拶して別れた。

大晦日まで残りの三日間で正月の準備をしなければならない。東京で初めての正月ということで、加江は実際よりも気がせいた。何よりも困惑したのは、彰一の仕事が金融機関ということで三十一日まで勤務があることであった。一人で買物や大掃除、おせち作りとメモ用紙を片手に済ませて、彰一の帰りを待っていたが、その大晦日も遅かった。紅白も終わる頃、相当なお酒が入って家にたどり着いた彰一は、服のまま寝込んでしまった。今まで郷里で、正月を折り目正しく迎える風習だった加江には悲しいことだった。

翌朝、昼近くに雑煮を作り、膳を整えて彰一を揺り起こした。加江は二人で初日の出を拝み、雑煮を頂いてから大国魂神社に初詣に行きたいと思っていた。しかし加江自身も疲れていた上に寝不足で、既にその気力もなくなっていた。寝正月とはこのことかと、彰一と炬燵にもぐってテレビの正月番組を見て過ごした。お餅とおせちのお蔭で、食事の手間がかからないこともあって、翌日は、結婚後初めてというほど一日を長く感じた。夕食後、それぞれ夜更けまで年賀状の返事を書いた。

三日の夜は早めに床に着いた。枕元のスタンドを引き寄せて彰一が愛読書の一節を朗読して加江に聞かせた。アランの教育論だった。加江は天井を見つめながら、低いが艶のある声に耳を澄ませた。全てを理解出来たとは思えないものの、人間の本质についてがっしりとした鋭い目で論じているのだと感じた。そしてそんな一時を過ごしている自分は、本当に幸せなのだった。

四日にはもう彰一は会社だった。加江は一人で中野に年賀の挨拶に行った。日頃の生活ぶりなど報告して、良江に彰一の会社の正月休みの少ないことや、付き合いで帰りの遅いことなどをこぼした。

「加江ちゃん。あなたのお父さんのような先生のお家のお正月とは違うのよ。伯父さんも私ももう二十何年間もこうして過ごして来たの。サラリーマンは大変なのよ。付き合いも大変だけど、命令一下いつ何処へ転勤になるかも知れないんですよ。女の私には分からないけど、男同志の見えない戦いもきついものだと思うわ。もう少しサラリーマン杉山彰一の身になってあげなさいね」

加江は一言も無かった。今までのいきさつもあって煙たいと思っていた伯母にサラリーマンの妻の心得を教えられて、それはそうだと納得し反省したものの、内心はやはり彰一の酒量がもう少し少なければいいのになあと思っていた。

加江もまた翌日から出社である。

高度成長の末期には電算システム課は部に昇格して、別のビルに移ったが、十七年前はまだ本社の五階にあった。

二三年ごとに拡張されて、事務管理室よりぐっと広がった機械室は、空調によって夏冬なく温度が設定されている。部屋の中央より壁際に十台ほどのMT（マグネットテープ）の薄いブルーのユニットが並び、それぞれの処理に従ってクルクル回転している。中央にはコンピュータ本体の中央演算処理装置（CPU）とカードリーダーが鎮座し、すぐ近くには大きなディスクのセットが何台か並んでいる。専門会社から派遣されて来る六人のオペレータが、昼夜

の二交代で休みなく、これまた図書館の本棚のように並び、ぎっしりとテーブルの懸かった膨大な数のMTラックと、機械群の間を忙しげに行き来している、といった光景だった。

ガラス扉で仕切られた事務管理室は、机とサイドデスクがグループ別に並べられて、それぞれにアウトプットの紙や書類のファイルが所狭しと積まれていた。まだめいめいにパソコンの端末が行き渡らない時代だった。職員二十名の部屋に四台の端末が置かれていて、早い者勝ちに使っていた。三四年後には各自にパソコンが与えられたが、まだ過渡期で、大量のデータを一括処理するバッチシステム全盛時代だった。そして事務管理室には、社内の各部署から新規のシステム構築の依頼が目白押しであった。

データは未だ殆どがIBM80欄のカードによる入力であった。二三年後には端末から記憶装置に直に入力出来るようになり、あっと言う間に様変わりするのだが、その頃は若いキーパンチャーが三十人ほどが、明るいグリーンのビロードのカーテンに包まれ空調のきいた部屋で、けたたましく鍵盤を叩いていた。パンチャーには腱鞘炎を警戒して、一般の職員より多い休み時間が定められていた。同じ若草色の絨毯の敷かれた広い更衣室は、ソファベッドも用意され、休憩室も兼ねていて、むせるよいな女性の活気に満ちていた。飴やスナック菓子などを摘みながらの笑い声が、時折事務管理室にも聞こえて来るのだった。

年が明けて、加江は隣席の川田を通してプログラムの作成を依頼された。ここでいうプログラムとはコンピュータに仕事をさせる命令を使って、データを入力し、必要なデータを出力させる一連の手順を編集したもののことだ。

コンピュータを動かす命令には、様々なレベルで何種類もの言語がある。直に機械を動かす数字だけからなる機械語、少し記号化したBASICやアセンブラ、より人間に分かりやすく作成出来て翻訳してくれるものに、数値計算用のFORTRAN、一般の事務計算としてファイルを扱うことに優れているCOBOL、両方を兼ねたPL/1などがある。当時の事務管理室では専らCOBOLを使っていた。

現在は様々なソフトが用意されていて、ただデータをパソコンの端末からキーを叩いて入力すれば結果を得られる時代である。プログラムの作成が必要だとしても、端末から入力して作成して行くことが出来る。しかし当時はコーディング用紙に一行ずつ書く、いわゆるコーディングをして、それをパンチャーがカードにするのだった。一行が一枚だから、大きなプログラムになると一本で千枚以上ににもなるのは珍しくない。それが一枚でも順序が違っていると正しい答えは出ない。コーディングもピリオド一つ落としてもとんでもないことになったりする。根気と神経の要る仕事である。

加江は、川田の作成したプログラム仕様書とにらめっこで、質問しながらコーディングをした。二週間ほどでやっと一本書き上げた。伝票を付けてパンチ室に依頼する。二日後カードになって返ってきたものを手にした時、加江は一寸感激したのだった。四百枚ほどのカードの重みを楽しみながら、早速機械室に持って行きオペレータに機械にかけてもらう。パパパツとカードリーダーが威勢よくそれを読み取ってCPUが機械語に翻訳(コンパイル)するのを待つ。エラーがあるかないか、リストがアウトされるのをプリンターの前でわくわくしながら待った。まだ当時は、機械室に自由に出入りが出来た。テストなどは自分でMTをか

けたり、カードを読ませたり出来た時代だった。

コンパイルのエラーは、エラーのステップと内容が数字や英文で表示される。そのカードは自分で作りなおして再度機会にかける。三四回繰り返してエラーがすっかり無くなった時点で、実行である。テストデータなどを入力してアウトプットを点検する。全て正しく処理が出来てやっと一本が完成し、長い一連の処理過程の一ステップとなるのだ。

こうして加江は、様々なタイプの入出力、処理、業務とプログラムをこなして行った。こうした機械とのやりとりの作業は、時間が驚くほど早く経過する。一月、一年も瞬く間であった。

加江が後から当時を思い起こしても、彰一と休日をどのように過ごしていたのか殆ど覚えていない。多分二人とも疲れ果てていて、手分けして行った掃除、洗濯のあとは、ただテレビの前で過ごしていたのだろう。昼食は、買い物かごに二人で出て、中華の食堂や寿司屋などでの外食が多かった。年に二三次、彰一の友達が訪ねてきて、飲んで泊まって行くこともあったが、それもいつか思い出となった。

起きている間は、夫の彰一と一緒に過ごす時間よりも会社の人たちと過ごす時間の方が遙かに長い。しかし会社にどんなに長く居たからといって、人間の距離が縮まることはなかった。夫婦の仲は時間では測れない不思議なものだと加江は思う。彰一は、どんなに遅くまで飲んで酔っていても、自宅に戻って寝て、朝また出社する。お互いを見つめ合う時間は少なかったものの、深い信頼感があった。若い二人は、それぞれが自分の仕事に充実感を持っていて、忙しさも励みになる期間だった。

三年経った。前年度は笠井グループに増員はなかったが、この年は丸顔の山岡進が入って来た。時代は進んでいた。彼は全くのパソコン少年で、大型機が専門の事務管理室では初めての存在だった。色白だが血色のよい大きな人だったが、もの静かで控えめなところに加江は好感を持った。彼の席は加江の隣になった。

五月、笠井のグループが新たな発注システムを開発することになった。担当は加江と専門学校卒で加江より一つ年下だが職歴四年目の吉田に決まり、そのチームの主任は加江になった。

チームは営業部と経理部との打ち合わせ会議が頻繁になった。笠井と吉田、加江の三人が三階の小会議室で、処理の内容の説明を聞いた。当然分からないことが多く、平常業務の間を縫って質疑の会議が二ヵ月ほど続いた。

与えられるデーターをどのように処理をして、要望どおりのアウトプットを出して行くか、他のシステムに無駄なく繋げて行くか。コンピュータ処理の設計は加江に委ねられた。加江は初体験の自分でシステムを構築するという楽しみにわくわくしていた。

まず必要なデーター項目を洗い出すことから仕事は始まる。パンチに人手のかかるカードからの入力出来るだけ少なくして、マスターや別ファイルから転記出来るものは転記するよう流れの中にその処理を組み込む。それらの項目からデータの帳簿とも言うべきファイルを作るのだが、そのファイルデザインも効率のよいものに設計する必要がある。デバッグという検証も

やり易く、項目に漏れなく、後々の保存に耐えられるコンパクトさも必要である。ファイルを読むためのキー項目の設計も重要である。テープのように順次読み込み処理するものもあれば、ディスクなどはキーによって必要データのみを読み取るダイレクトアクセスをするものがあり、それには一意のキーが必須である。それも効率もよい構成を考えなくてはならない。

またデータ量からの資源の配慮も必要となる。処理の流れも重要で、その手順の如何で機械の処理時間も大きく左右されてしまう。といった案配で、新システムの開発は頭脳の働きの見せ場とも言えるやり甲斐のある仕事なのだ。

加江は毎日生き生きと出社した。処理を頭に浮かべては、ファイルのデザインやフローチャート作りなどに没頭した。大まかなシステム設計が出来た段階で、その設計書を笠井に提出して、点検してもらうことになっていた。

笠井は大柄で、顔だちも目鼻だちがはっきりしていて、パンチャーから「事務管理の高橋英樹」と呼ばれていた。体格は似ていたが、テレビで見る高橋英樹の明るい闊達さは彼には感じられなかった。物静かで色白な彼には、どこか腺病質の感じがした。彼は入社して直ぐに電算部門に配属され、当時は中堅の実力者であった。

ある日の午後、加江は黒板と衝立で仕切られた室内の一隅の打ち合わせ場所で、設計書の概要を笠井にチェックしてもらうことになった。加江は長時間を笠井と一対一で接するのは初めてで、緊張している加江に笠井は一寸笑った。

まず処理の流れを大まかに示すフローチャートの説明から始まった。営業からのデータをどのような形で取り込むか。外注先にどう振り分けるか、各ステップの処理は何をするためのものか。どの時点のデータを保存しておけば、再処理に問題なく対応できるか。作成されたアウトプットが要求の条件を満たせるかなど、細かいチェックに対応して説明する。ファイルについては、将来の業務の拡大も視野に入れて、五分の一ほどの予備のスペースを取る必要があることを笠井が指摘した。

「コーヒープレイクにしよう」

笠井が立ち上がった。加江も彼の後を追った。二人はそれぞれ自動販売機でカップのコーヒーを買くと、それを手に再び打ち合わせ場所に戻った。

「川内の印象はどうでしたか」

仕事以外の話を珍しく笠井が切り出した。

「川内川が好きになりました。私の故郷にはあんな大河はないんです。頼んで川に沿って宮之城まで走ってもらいました。河口の悠々とした景色も素晴らしいと思いました。それに海があるってこともいいですねえ」

そして加江は好奇心を抑えられずにおずおずと聞いた。

「笠井さんの奥さんも鹿児島の方ですか」

今回の笠井は真面目に、声を低めて短く答えた。告白ともとれる調子だった。

「いや、僕の妻はね、僕が進学のために東京に出て来て下宿した家の奥さんだったんですよ。それが離婚して僕と結婚したという訳です」

(ああ、こんなことを聞くべきではなかった。ごめんなさい。ごめんなさい)

加江は自分のあさはかさを責め、心の中でひたすら彼に謝った。学生の笠井のもとに、夫を捨てて子供と走った彼女と笠井の間には、火のような恋愛があ

ったことだろう、地獄の葛藤もあったことだろうと思った。黙って俯いてしまった加江に、笠井はまた付け加えた。

「僕の母は五歳の時に亡くなったんですよ。母の妹が母になって、弟が生まれて、まあずっと何や彼やある人生ですよ」

そして彼は再び加江の作成したブルーの厚紙のファイルを静かに開いた。加江は笠井の表情に見たことのない暗い影をかいま見たと思った。

加江の担当したシステムは会社としては中型のシステムであった。ジョブのステップ（コンピュータの仕事の段階）が四十くらいの物で、うち二十三のステップはプログラムを作成しなければならなかった。加江自身も肝要な難しいプログラムは作成するつもりでいたが、大部分は外注の業者に依頼することになる筈だった。そのための仕様書の作成が一仕事であった。全然業務を知らない社外の人に、目的のプログラムを作成してもらわねばならないからだ。自分では分かっていることを、他人に正確に分からせることはなかなか難しいことだ。条件をキッチリ指示する必要があるのだ。事務管理の一員としては当然の仕事ではあるが、加江には初めての仕事であった。それはまた、それまでの二年余りの経験を生かすよい機会でもあった。

外注に出すためには、データの流れに沿って、一本ずつプログラムの仕様書を書き、笠井の承認を得ねばならなかった。

主任のデスクの脇に立った加江は、赤ペンを手にした笠井に何度説明の不備や表現のまずさを指摘され、差し戻されたことだろう。同僚の手前ということもあって、加江は恥ずかしく口惜しい思いに涙ぐむこともあった。しかし全てが一人前になるための試練だったと加江は後になって覚った。外注に出すための笠井のチェックは、加江に対しては一際徹底的になされたのであった。

ある日の昼休みに山岡が自分のワープロを開いて見せた。「これはゲームです。こうやると上がりになるんです。一寸やってみませんか」

画面の左に荷物らしい長方形の物が七八個あり、中央に所どころ口の開いた迷路があって、その奥が倉庫である。ゲームは荷物を移動させて全部倉庫に納めればよい。口を通すのも、積む時も考えないと入りきらない。完成すると次の段階に進むことが出来て、段々に高度になって行くというゲームであった。加江は単純に熱中し、よい気晴らしを与えてくれた山岡に感謝したのだった。

その頃から加江は、室外に出て、営業部の担当者や経理課に頻繁に出入りするようになった。坂本マリと知り合ったのはその頃だった。少しずつシステムが形をなして、アウトプットが出るようになると、彼女はそのチェックに事務管理に頻繁に出向いて来た。

事務管理の女性は、年配の気難しい庶務担当は別として、加江も含めて仕事一途の三人だけだったので、若いマリが入るとポッと明るくなった。マリも事務管理室の居心地がよいのか、チョコレートやキャンデーを手にして昼休みに来て、気軽に皆とおしゃべりをして行くのだった。

システムはまだ半ばという状態でその年も暮れた。加江も彰一を当てにしない年の暮れにすっかり慣れて、気の済む程度の支度を一人で済ませた。

この所ご無沙汰になっていた伯父の年始には、二日の朝二人で出掛けた。伯父は大宮の支店長に昇格していた。

伯父の家に入ると何か雰囲気が違うのに気づいた。門松はあるが、下駄箱の上の置物がないし、座敷もさっぱりしている。伯母も従妹たちも留守であった。

「この辺も再開発ということで、売ることにしたんだ。所沢に新築してね。一寸遠くなるが自然が多い。老後はやはり空気のよい所が一番だと思ったんだ」

加江はこの家も見納めか感慨深く見回した。地上げ屋の攻勢が話題になっていた。東京はどんどん変わっている。古い建物は殆ど消えて、小さなお稲荷さんがビルの影に骨董品のように挟まれていたりする。これら全てが記憶の中にしか存在しなくなるということは、自分たちの世代が存在しなくなれば永遠に闇の中に消え去るのだ。伯父には生まれた時からの家である。その言葉とは裏腹にきつと淋しいに違いないと思った。

五月になった。連休も終わったある日、苦み走った顔の石井が珍しく鉛筆を片手に笠井のグループの所にやってきた。「社会科見学に行きませんか」

それは競馬への誘いだった。何人かが参加を申し込んだ。府中に住んでいるのだから一度くらい競馬場に行ってみるのも悪くないと思った加江は、夫と二名と言って申し込んだ。加江と同様に適当に野次馬根性もある彰一のことだ。初体験を面白がるだろうと思った。帰宅した彼にその話をすると、加江の思った通り、あっさりOKしたのだった。

ある晴れた土曜日の朝、二十名ほどが東府中の改札口に集まった。笠井はいなかった。石井の先導で競馬場正門前まで電車に乗った。一同は物珍しげにキョロキョロしながら場内に入った。木々の新緑の鮮やかな季節で、萌葱の芝生が広がり、植え込みのチューリップの赤黄白と、それは何処かの公園と見紛うばかりの手入れの行き届いた場所だった。

また行き交う馬の姿の優美さにも目を惹かれた。枠番で買うのが簡単だという。加江は彰一が自分の誕生日は二十五日だから2-5を買うようにというので、売場に走り五百円分だけ2-5を買ってスタートを待った。

やがて何とか馬がスタートの枠に納まったかと思った所でピストルが鳴り、各馬が一斉に疾走を開始する。どれが2-5なのかも分からないのに、結果はそれが大当たりで三十倍になっていた。当たったのは彰一だけだった。いわゆるビギナーズラックであった。その後も加江は彰一が調子に載らぬようにと五百円以上は買わなかった。結局そのあと二回当たって三万円ほどになった。十五倍ほどである。

夕方になった。先生格の石井も含めて他の人たちは全員が全回全滅で、そろそろと駅に向かった。彰一は駅の近くの小料理屋に一同を呼び入れて、ビールをおごり、全部の儲けを叩いた。そして「そのうち、遊びにいらっしやい」と初対面だった皆と機嫌良く別れた。

秋も深まって、恒例の課の社員旅行があった。加江は入社した年は拳式を控えていたのでパスしていたし、翌年も実家の縁戚の不幸があって参加していなかった。しかしその後、那須・日光と千葉の鴨川の旅行に参加していた。

その年の行き先は下田であった。バブルの最盛期で、職場の気分は明るかった。非番のオペレーターも加えて七十名ほどが二台の大型バスに分乗した。伊豆

半島の東海岸をあちこち見学して石廊崎を巡ったあと、下田で一番大きいと思われるホテルに着いた。

宴会は、パンチャーたちの合唱もあって、加江がびっくりするほど賑やかなものだった。

夜は原田と沢本と女三人で枕を並べた。二人は地方出身で、それぞれローンで府中のマンションを買っているということだった。そして海外旅行の体験や計画をぼそぼそと話していた。彼女たちは、社内の男性には全然興味はないようで、話題にもならなかった。加江は、彰一にも一度海外旅行を計画してもらいたいものと思った。

翌日の帰りは天城越えであった。朝食後すぐの出発だったこともあり、ループを通過して天城トンネルに入る頃、加江はすっかり車に酔っていた。必死に我慢していたが、浄蓮の滝で降りた時、一人木陰で嘔吐した。皆先を行って、誰も見ていないと思っていた。大きな杉の影から出てみると、十メートルほど先に笠井が立っていた。加江はバツの悪い思いで頭を下げた。笠井は加江が近寄るのを待って

「大丈夫ですか」

と聞いた。加江は黙って頷いた。

滝を見たあとまたバスに乗った。昼食は森の中の大きなログハウスだった。猪鍋のようだったが、加江は何も口に出来なかった。バスに乗るとき笠井からオレンジの缶ジュースを手渡された。加江はその気遣いが嬉しかった。

家に帰って加江は彰一に言った。

「何か疲れているらしくて、帰りは気分が悪くなって笠井さんに心配かけちゃったの。日頃とってもお世話になっているし、貴方の先輩でもあるんだから、一度御馳走してくださらない？競馬にもお見えでなかったし」

彰一が承知したので、彼の都合のいい日を聞いて、メモをした。

翌日、加江は周囲に人のいない時を見計らって笠井に聞いた。

「あさっての夜は何かご予定ありますか」

彰一の都合の良い日の一番近い日が明後日だった。

「特に何も無いけど、何かあるんですか」

「いえ、杉山が先輩に、是非一献差し上げたいって言ってます。彼は遅い日ばかりなんですけれど、あさっては開けておくと申しますので。駅前の喜六寿司に七時ということをお願いしたいのですが」

「いや、それは有り難う」

加江はなに食わぬ顔で会社の二日間を過ごした。そして朝の出勤前、彰一に必ず時間通りに来てくれるようにと、くどくどと頼んだ。

当日は三十分前に寿司屋に行って、座敷の隅の席を確保した。七時前に彰一が来た。二十分待ったが笠井は現れなかった。加江は会社に電話をして笠井を呼び出してもらった。意外にも出たのは石井だった。

「今緊急のトラブルが発生して、笠井さんは機械室です。杉山さんに謝ってくれと言ってます」

加江はがっかりして、彰一に事情を話した。トラブルはこの仕事には決して珍しくない。徹夜の復旧作業など日常茶飯事と言ってもよかった。しかし安定稼働している昨今、何も笠井でなくとも済むのではないかと一寸不満な思いだ

った。お造りを頼むのをやめて、ビールと特上の寿司を頼んだ。二人で外食することはよくあったが、高級な寿司屋の特上は初めてで、贅沢気分を味わうことで、加江は気落ちした気分を紛らわせて帰宅したのだった。

また忘年会が来た。席が乱れ加江の近くに人が居なくなった際に石井が近づいて来た。

「寿司屋で待っているなんていいですねえ。笠井さん、大分悩んでいましたよ」

と意味ありげにそっと言った。加江は真っ赤になった。

「なんてことを。この人は私が一人で笠井さんを待っているとでも思ったのだろうか」

趣味がセックスの石井に説明するのも空々しいことになりそうだった。加江は黙っていた。石井に待ち合わせのことを話した笠井にも腹を立てた。大体笠井は加江の待っている理由など説明するような男ではないし、石井にそんな誤解を与えたことなどは考えてもいなかったのだろう。ただ石井に誤解されるような何か加江にあるとしたら、これからは注意して笠井とはもっと距離を置くようにしなければならないと思った。

年が明けてしばらくして、体調がすぐれない日が続いた。加江はもしやと思って産婦人科医の診察を受けた。妊娠三ヶ月、予定日は七月十三日ということだった。帰宅した彰一は意外なほど感激した。多少の酔いもあってか、加江を横たわらせて全身をそっと愛撫するのだった。加江は何か安産のまじないでも受けているような気持ちで、真面目な顔で目を閉じていた。

二月に入って、テストランが始まった。加江はまだ妊娠していることを会社には内緒にしていた。四月の本番が成功するまでは頑張らなければならない。周りの気遣いは気の重いことになると思った。そして一際精を出して、デーリー業務（日次）のジョブばかりでなく、新規に月次、年次のシステムも平行して作って行った。すでに加江も二年前の加江ではなかった。技術計算専門の原田や沢本と違って、加江はシステム設計や外注業者との対応も適当に任されていた。この分野の仕事には男女の格差は感じられなかった。

本番が稼働し始めた。リストに多少の不備があったが、簡単に訂正出来る程度のもので、まず問題なかった。その事は事務管理室全体がほっとした感じだった。その頃になると薄着になったこともあって、誰もが加江の体型の変化に気がついていたのである。

四月末の月次処理も問題なく通過した。この時点で、年初から二人になることを避けて来た笠井に加江は告げた。

「出産の予定日は七月十三日ですので、六月二日からお休みさせていただきます」

当時の産休は前後六週間ずつであった。

「出産後はどうしますか。システムは一年経過してみないと完全かどうか分からないんですがね。それに年次もあるし」

明らかな慰留だった。加江もこの仕事自体は好きで継続して働きたかった。

「今から保育園を探して、何とか続けるつもりでいます」

そう答えた加江に、笠井は会社が送り出している市議員に、市の保育園に

入れるよう頼んでみようと言った。

七月十六日の朝、加江は出産の気配を感じた。彰一に用意してあった必要な品の包みを運んでもらって入院した。看護婦が初産は十五時間くらい掛かるといので、彰一はそのまま出社した。しかし実際は午後五時前に生まれたのだった。

出産は痛むとは聞いていたが、自然現象の一種なのだからと、神経質に考えることのなかった加江は、襲ってくる激痛に驚いた。ベッドの手摺りを握りしめ目の眩むような痛みを耐えながら、母になるということの厳粛さを感じていた。太古から全て母と叫ぶものはこの痛みを堪えて来たのだと思うと、どんな母でも尊敬に値するとさえ思うのだった。

七時頃、会社から病院に直行した彰一は、加江の横の小さなベッドに眠っている色白で髪が黒い男の子に体面した。覗き込んだ彼は、小さく柔らかな頬や手を指先でそっと撫で続けた。無事の出産を神に感謝しているかのようだった。彼は真剣な面持ちで終始無言だった。加江は、彰一が、この子の将来は自分の手中にあるという責任の重さを感じているのだろうと思った。

その子は浩一と名付けられた。

会社から依頼を受けた市会議員の推薦のお蔭で、浩一は加江の通勤途中にある市立保育園の入園許可が得られた。加江は「会社にとって必要な女性」という推薦を得たことが嬉しく、一寸得意だった。そして九月一日から、日働六時間の短縮勤務が始まった。加江が平常な勤務に戻ったのは一年後であった。

それから四年が経過した。笠井は課長代理となってグループ長は川田になっていた。山岡は関西でパソコンのシステムを作ることになり、支援の為に大阪に転勤していた。その後には高専卒の男性と短大卒の女性が入っていた。

一年前、加江たちは会計の大きなシステムの改造を手掛け立ち上げた。それも安定稼働して来た二年目の冬、加江は再び妊娠したことに気付いた。

今度は続投は無理だと決心して、はやばやと年度末に退社することを申し出た。その矢先、彰一が名古屋に転勤と決まった。単身赴任は避けて、加江も転居することになった。

三月に入って、加江の送別会が五回開かれた。営業部や経理部、総務部とそれぞれ業務の担当者が開いてくれたのだ。勿論電算システム課も盛大に送ってくれた。彰一も自分の送別会もあったが、加江を優先させて、保育園に浩一を迎えては、不器用ながら相手をして加江の帰りを待つのがだった。

最後は旧笠井グループの送別会であった。山岡も上京して来るといので土曜の夜ということになった。会場は喜六寿司の二階という。笠井のご指定とすぐに分かった。加江は以前腹を立てたことも懐かしいと思った。

九名全員が揃った。今までの思い出話が尽きなかった。加江も初めて二次会に付き合うことになった。駅近くのカラオケバーであった。

薄暗く狭いバーのソファに、加江は笠井と向き合って座った。他の人たちはパラパラと歌詞の本をめくっていた。

「何回も申し上げますが、お蔭様で何も知らない私が楽しく仕事させて頂きま

した」

加江は心からお礼を言った。何かほっとした様な心残りの様な複雑な気持ちだった。

入社から既に十年が経過していた。笠井も四十歳を越した筈だ。彼は娘が専門学校を卒業して、同じ情報産業関連の仕事に就いていると言った。

「笠井さんご自身のお子様はいらっしゃらないの」

「僕の妻はね、結婚した翌年子宮筋腫になって取っちゃって子供は出来ないんですよ。」

加江はまたまた済まぬことを聞いたと後悔した。自分はどうして毎回こんな質問をしてしまうのだろう。どぎまぎしている加江を置いて笠井がマイクを握った。彼のリクエストが懸かったのだ。

汽車を待つ君の横で
僕は時計を気にしている
季節外れの雪が降っている
東京で見る雪はこれが最後ね
さみしそうに君はつぶやく……

「なごり雪」だった。笠井は囁くように歌っていた。

今春が来て君はきれいになった
去年よりずっときれいになった
去年よりずっときれいになった

加江はこれが笠井の精一杯の別れの言葉だと思って、しみじみと聞いていた。

そしてまた八年が過ぎた。彰一は名古屋の後、広島を経て、三年前に郷里の鹿児島に転勤になったのだった。

浩一は中学一年生、二番目の女の子千穂は二年生になった。瘦身だった彰一だが、この頃はめっきり貫禄が出て来て、加江は毎年背広を新調させられている。さざ波こそあれ平凡に平和に年月は過ぎていた。そして時折のマリの便りの他は、滅多に昔の会社など思い出すこともない毎日だった。

笠井の死の報を聞いて、加江は改めて昔を振り返った。今日は土曜日というのに、それぞれが外出して家には誰もいなかった。

何回も笠井に個人的な質問をした自分は、何処か彼を異性として意識していたのだと思った。そしてハッと気がついた。

彼が喜六寿司に現れなかったのは、何も加江の申し出を誤解していたのではなく、笠井が彰一と会うのをためらっていたのだということ。その気になれば何度も話し合う機会があったのだ。実際、加江の家での飲み会もあって、彰一も加江の仲間と忌憚なく酒を酌み交わしていた。それなのに笠井は遠い鹿児島の一地方高校の同窓でありながら、加江の家に姿を現したこともなければ、彰一と話し会ったことなど全くなかったのだ。

笠井は、自分をずっと意識していたに違いないと、今加江は確信を持って思うのだった。笠井は自分の内心を彰一に見透かされるのを恐れたのだろう。どうして今までその事に気付かなかったのだろうと加江は思った。

加江は、石井の言葉の調子から、加江が笠井を呼び出して誘惑したように受け取れたのかもしれないと勝手に思い込んでいた。そして自分の潔癖な性分から、長いこと笠井を避け続けて来た。しかし今、加江自身の心の奥に笠井を意識しているものがあつたことに気付いて、改めて思い返すと、あの頃の自分が笠井の気持ちをはっきりとは認識していなかったからこそ、仕事に集中して勤務を続けられたのだと思った。

加江はカーテンを閉めて、しばらくまた回想に耽った。他の人たちとは気楽にした最後の別れの握手も、笠井とは目が合っていたのに、何故か手を出せなかったことを思い出した。

思えば長年の間彼の温かい眼差しに見守られていたが為に、何事もなく勤めることが出来たし、仕事に対する会社の顕彰も受けられたのだ。その幾つかの節々が目に浮かんで来た。確かに上司の温情というだけのものではなかった。自分の心の奥深くを覗いて見れば、加江は当時も彼の気持ちをそれとなく分かつてはいたのだと思う。しかしもし彼がその気持ちを表に出したとしたなら、加江はすぐにも退社していたに違いないと思う。何故にそう思うのだろうか。

自分は確かに自縄自縛している所があると思った。それは自分自身を傷つけないという臆病さからなのだろうか。後ろめたさを背負いたくないというエゴなのだろうか。

加江は気を静めて自問自答していた。夫とは休日と夜を共にするだけの平穏なサラリーマン生活にすっかり馴染んでしまっていて、あまり突き詰めて考えることもなかった。

結婚当初のように、全てを彰一に捧げ切るといった生一本の気持ちは今や緩んでいることは確かだった。子供達の存在が夫の前にあつた。それに長い生活の経過の中で、彼の弱点や欠点が気にならない訳はない。今では彼が理想の男性像なのだと言断言は出来ないのではとも思う。しかしそれはお互いさまで、加江は自分が理想の女性像からはずっと遠い女に違いないと自認している。ただ長い年月が既にお互いを自身の一部のように分かちがたい存在に擦り合わせているのだと感じている。

加江は日頃心の中はいつも晴朗でありたいと願っている。両手を広げて太陽を正面から仰ぎ見ることの出来る心。今まで自分は意識して、ぐっと背筋を伸ばし、心の火の粉を内にも外にも振り払って来たのだと思う。一時の火遊びなど結果は分かっている。人生は大切に生きなくては。

加江は「なごり雪」のカセットを取り出してプレイヤーにかけ、ソファに深く腰を下ろした。

動き始めた汽車の窓に顔をつけて
君は何か言おうとしている

君の唇がさようならと
動くのがこわくて下を向いていた・・・

涙がどっと溢れてきた。今となっては彼と語る術はなく、確かめる術も何もない。加江の努めて背伸びして理性的であろうとする交錯した思索は、いつか途切れ途切れになって、抑えきれない切なさのみがぐっとこみあげて来るのだった。イルカの歌はまだ続いている。ハンドタオルを目に当てたまま、加江は暫く動かなかった。